

## 年間第14主日

マタイ 11・25-30

高円寺教会 2017.7.9 9:30 ミサ  
クラレチアン宣教会 うめざき たかいち 梅崎 隆一神父

人は生まれたときから、自分の望みとは関係なしにいろいろな物を背負わされて歩いていきます。そのうちに自分で厄介なものを背負ってしまったりして、だんだんしんどくなっていきます。社会や親の望みどおりに歩いていける、力のある子どもだったらよかったのだけどそうではありませんでした。こうして子どもの頃からいろんなものを背負ってきましたが、親や周りの人、社会に応えようとおもっても、自分にとっては非常に重たいものでした。

周りの人たちは重たいくびきを担いでちゃんと歩いているように見えたので、周りと自分を見比べて、だんだん劣等感を持つことになります。社会や周りの人や親は「あなたにはそんなに難しいことは言っていない、普通に人並みになりなさい」というメッセージを押し付けます。しかし、その「普通に人並み」というのがすでに高いハードルでした。それを最も感じた場所は、学校というところでした。できれば学校というところでは、「テストで優劣を付けずに、子どもの悩みに大人が向き合ってくれたらいいな」と思っていたのですが、学歴が全てだという重たいくびきを子どもの背中に乗せることが学校の中での全てであったと、今でも感じています。

人生のある時に、重たいくびきを持っているわたしが、キリストに出会いました。キリストは、「人が作り出したくびきにつながっていたら、あなたはそのくびきの奴隷になるから、あなたはもうそういうくびきは捨てて、神様が与えるくびきだけを持って歩いていったらどうですか。そのほうが楽でいいよ」と教えてくれました。

そのくびきとは、神様を愛することと、隣人を愛する、2つのことです。「それだけを担いであなたは歩いていきなさい」と言われて、非常に嬉しくなりました。大きな開放感をその時に感じました。

くびきというのは二頭の牛をつなぐための道具です。社会のくびきも二頭立てで、仲間がいるから重たいものでも引きずってなんとか前に進んでいくことができますが、今日では多くの場所でそれを独りで担ぐことを強いられて、それが普通であるように錯覚しています。

キリストのくびきには必ずキリストが共にいて、愛することを手伝ってくだ

さいます。

でも、愛するということは時々人生の中で難しいことです。今のわたしにとって、愛するために受け入れなければならないものが、二つあると思っています。一つは、人がわたしを嫌っても、その嫌っているその人の状態を受け入れる。もう一つは、孤独であることを受け入れることです。

「嫌われたくない、愛されたい」と思う人は、人からの関心を引くために、人の奴隷となろうとし、キリストのくびきを捨てて、もう一度元のくびきに戻ってしまいます。「独りでいるのが怖い」人も、キリストの「愛しなさい」というくびきから離れてしまって、「愛されたい」という気持ちから、自分自身をもう一度同じくびきの奴隷にしてしまう。せつかく自分を苦しめていたくびきから放たれて、キリストのくびきを担ってキリストと一緒に歩いているのに、キリストとそのキリストのくびきを捨てて、他の奴隷のくびきに戻っていったら、後悔することになるのでしょう。

「愛すること」は素晴らしいことなのですが、場合によってとても苦しいことですから、時々疲れて歩けなくなったりします。わたしが疲れて歩けなくなっても、キリストは不満を述べたり、怒ったり、角で突ついたり、弱いわたしを引きずって歩いたりせず、励まし待っていてくださいます。

キリストと共に人生を歩む人は、開放に向かうプロセスを歩んで行きます。全く課題が無くなるわけではなく、むしろ大切なことに気付くことで課題が出てきます。しかし、その荷は軽く負い易い。なぜなら、結果が良いものだということが分かれば分かるほど、人はその課題に向き合い、取り組みます。キリストと共に歩む人は、キリストの道を人生の中で示し、キリストがその人を開放へと導いたように、他の人にもその道を示すこととなります。人生の中で、人が作り出したくびきによって疲れることは、父のみ心を知ることのできるチャンスでもあります。そして、人の作った奴隷のくびきにつながれたままになるのか、その重たいくびきを外してキリストの担い易いくびきを選択するかが問われます。

このミサの中でキリストに出会ったわたしたちは、人が作り出した、人を奴隷にする重たいくびきから解かれて、神の子となる新しい「人と神を愛する」というくびきを受けました。今日も、天の父のみ旨である「愛する」ことをとおして、多くの人を開放することができますように、共に祈りましょう。